

Title	「ハビトゥス」と時間の関係について
Sub Title	
Author	村井, 重樹(Murai, Shigeki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.66 (2008.) ,p.97- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成19年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000066-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平成 19 年度 大学院高度化推進研究費 助成金報告

「ハビトゥス」と時間の関係について

村 井 重 樹*

1. 研究目的

本研究は、従来の社会学が十分に焦点を当ててこなかった「習慣」という視座から社会学理論の構築を行い、社会的現実を分析するための新たな可能性を模索することを目的としたものである。そして、本研究は、ピエール・ブルデューの「ハビトゥス」概念に依拠しながら、そこに内包される時間性に着目することによって、その理論的可能性を探求しようとするものであった。

以上の問題意識に基づき、本研究助成の成果を、論文として「『ハビトゥス』概念の行為論的射程——ミード理論からの示唆による『実践』の再把握に向けて——」（2008, 『ソシオロジ』第 52 巻 3 号）および「ピエール・ブルデューにおける『歴史』の位置——『ハビトゥスの二重の歴史性』という視座——」（2008 [掲載決定済], 『社会学史研究』第 30 号）にまとめ、発表した。そのため、両論文の概要を説明することで、本研究助成の成果報告に代えることにしたい。

2. 「『ハビトゥス』概念の行為論的射程——ミード理論からの示唆による『実践』の再把握に向けて——」

本論文は、P・ブルデューが「ハビトゥス」概念によって把握する「実践の論理」を、その時間への視点に着目しながら検討し、G・H・ミードの「創発的現在」に関する議論を援用することで、そのさらなる行為論的展開可能性を探ることを目的とした。そこで鍵となったのが「不確定な現在」という視点であり、ミードが示唆するその含意によって、ブルデュー理論が描くことのできない「実践」の側面を照らし出し、「ハビトゥス」概念自体の問い直しを試みた。

まず、ブルデューの「実践の論理」を、その把握に不可欠とされる「ハビトゥス」概念に基づいて考察した。ここでは、過去の経験に基づいた「ハビトゥス」が「現在」において、過去と未来が内包される「実践仮説」を産み出すことで、「実践」の遂行が可能になるという点を確認した。すなわち、「ハビトゥスは、現在における未来の現前を可能にする、現在における過去の現前である」（Bourdieu 1997: 304）といえる。

次に、ミード理論における「創発的現在」の議論を概観し、その「現在」が新奇性をともない、意味の再定式化がなされる現場であることをみた。ミードによれば、「現在」は、過去の再構成を含み、行為の遂行を導く新たな「作業仮説」を生む。なぜなら、「類例のないあらゆる現在は、ある意味で特定の過去を創造するのであり、その特定の過去は、その現在を説明するために、論理的に要請される」（Mead 1929: 335=2003: 132）からである。換言すれば、創発的現在において、われわれは、生起する新奇な出

来事を起点として過去を再構成するとともに、現在へとつらなる連続性を導き出し、さらにそこから未来への仮説を確保するということである。

そして、このミードの論点を踏まえれば、「行為者の諸性向と、彼らが溶け込む世界に内在する期待や要求の一致 (accord) を前提とする」(Bourdieu 1997: 212)、つまり「ハビトゥス」を形成した過去の条件との調和を重視するブルデューの「実践仮説」では、新奇性をともなう「不確定な現在」の意義を十分に汲み取ることができず、一面的な「実践」理解に陥るということを示した。それゆえ、「不確定な現在」という視点を考慮した「実践」把握を試みるには、「ハビトゥス」と新奇性が表裏一体のものとして問われなければならないということを主張した。

3. 「ピエール・ブルデューにおける『歴史』の位置——『ハビトゥスの二重の歴史性』という視座——」

本論文は、ピエール・ブルデューの社会学理論を、「ハビトゥスの二重の歴史性 (double historicity of habitus)」(Bourdieu and Wacquant 1992: 139) という視座から検討することにより、そこに内在する「歴史」の位置付けを明確化しようと試みたものである。

ブルデューは、行為者が社会的世界を自明なものとして生きる経験に、彼らの社会的現実を見出す。ブルデューにしたがえば、この行為者にとっての自明性は、何が正統なものであるか、何が価値をもつかといった問いを排除させる形で、彼らに正統性 (legitimite) を承認させるということの意味でもいる。ブルデューは、この経験を「ハビトゥス」と「場」、すなわち「身体化された歴史」と「客観化された歴史」の出会いとして捉えようとする。

ブルデューは、この「二つの歴史状態の一致」を、N・エリアスが『宮廷社会』で論じる「礼儀作法」を通じた宮廷人の相互依存関係に見出していた。そこで、ブルデューにとって重要となったのが、「宮廷人の『精神』は、その社会構造、つまり、その図柄から、かれら宮廷人が互いに作り合っていた相互依存の網目組織から生れている」(Elias 1975=1981: 177) というエリアスの視点であった。本論文では、そのエリアスの視点を、「ハビトゥスの二重の歴史性」という視座から読み解くことによって、ブルデュー理論に内在する二つの「歴史」の位相を導出し、明確化を試みた。

この検討からまず見出されるのは、「歴史の忘却」という位相である。ブルデューにとって、現在において自明の理として生起するものは、脇に退けられた可能性を無意識に追いやり、歴史を廃棄した結果産み出されたものである。闘争という歴史のなかで可能性を廃棄し、自律化することで制定された現在の「場」の正統性は、「身体化され無意識になった構造」と化し、そのもつ歴史性自体が行為者に忘却されるということである。

次に見出されるのが「歴史の創出」という位相である。行為者が「ハビトゥスの二重の歴史性」を体現しているからこそ、正統性に対する知覚・評価が、彼らの帰属する位置に応じて相異なり、「場」という空間内部でそれをめぐる闘争が成立する。ブルデューからすれば、そうした闘争を通じて歴史が創出されるのである。本論文では、こうしてブルデュー理論に内在する「歴史」の位置を検討した。

引用文献

- Bourdieu, P., 1997, *Méditations pascaliennes*, Seuil.
 Bourdieu, P. and Wacquant, L., 1992, *An Invitation to Reflexive Sociology*, The University of Chicago Press.
 Elias, N., 1975, *Die Höfliche Gesellschaft*, Verlag. (=1981, 波田節夫他訳『宮廷社会』法政大学出版局)

Mead, G. H., 1929, "A pragmatic theory of truth." In A. J. Reck (ed.), 1964, *Selected Writings: George Herbert Mead*. University of Chicago Press: 320-44. (=2003, 「プラグマティズムの真理理論」加藤一巳・宝月誠編訳『G. H. ミード プラグマティズムの展開』ミネルヴァ書房: 113-144.)

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科

不登校現象をめぐる社会運動における〈運動ナラティブ〉の領有

森 啓 之*

1. はじめに

筆者の研究課題を、簡単に述べると、それは、「不登校」への肯定的意味付けがなされる言説が、いかなる「場」で生成されており、その場で働き得るダイナミズムは、どのようなものであるのかという点を掘り下げることである。このことを掘り下げるために必要な研究内容を、いくつか挙げるならば、それには、次のような内容が含まれる。

第一に、不登校への肯定的意味付けがなされる場を指定して、その不登校の肯定的意味付けの位相の詳細を、掘り下げることである。既存の社会学的不登校研究が行ってきた、不登校の肯定的意味付けに関する描写は、非常に一面的であった。それは、それらの先行研究が、不登校の肯定性を主張する社会的勢力へ、十分に焦点をあててこなかったためである。不登校への肯定的意味付けが行われる場に焦点をあてる。筆者の研究課題にとっても、この研究内容は重要なものといえる。

第二に、そのような肯定的意味付けが行われる場へ参加する人々の背景を、さまざまな視点から明らかにすることである。既存の社会学的不登校研究は、不登校への肯定的意味付けを行う主張が、不登校経験者やその保護者などの、当事者性を持つ人々のみによって立ち上げられてきたものと描写してきた。しかし、そのような場の担い手には、不登校経験を持たない多様な背景を持つ人々も含まれる。そして、その多様性が、立ち上げられる主張に影響を及ぼす可能性がある。

第三に、不登校への肯定的意味付けがなされる場と、それ以外の、公的な言説が生成される場との関係性を明らかにすることである。例えば、教育行政という公的言説に対して、不登校を肯定するという対抗言説を立ち上げる人々は、自らの主張が、公的言説へ与える影響を考慮しながら、戦略的に、自らの主張を打ち出していく。そして、その点も、不登校への肯定的意味付けが行われる場で起こるダイナミズムに、影響を及ぼす可能性がある。

これらのこと以外にも、掘り下げるべき個別の研究内容はあり得るが、以上の点を掘り下げるための、具体的な事例として、筆者は、例えば、登校拒否運動と呼ばれる、不登校現象をめぐる社会運動などに、注目してきた。その社会運動には、全国ネットワーク化した組織団体や、それらの組織団体と緩やかに相互連携しながら活動する、不登校の子どもが通うフリースクールやフリースペースが含まれる。それらの個々の集合体の共通項を挙げるならば、それは、不登校を逸脱視する社会的まなざしに対して、絶えず反対の姿勢をとり続けてきたことである。筆者は、それらの社会運動にも焦点をあててきたのであるが、その際に、経験的社会運動体の記述・実証分析に蓄積を持つ、社会運動研究から示唆を得て、そ